

## 学会名

第25回日本骨粗鬆症学会  
2023年9月29日～10月1日

## 研究テーマ

大腿骨近位端骨折および椎体骨折の二次性骨折発症までの受傷期間に影響を与える要因について—1年以内の再骨折と1年以上の再骨折の比較から

## 病院名

医療法人社団健育会 ねりま健育会病院

## 演者

○間藤大輔(理学療法士)

## 概要

【研究背景】高齢化に伴い、骨粗鬆症の患者が年々増加しており、大腿骨近位端骨折および椎体骨折といった脆弱性骨折への対策が医療のみならず社会的な課題になっている。一度骨折を生じると、再骨折のリスクが高まることから、健康寿命の延伸という観点においても二次性骨折の予防は重要である。

【研究目的】脆弱性骨折後に再骨折を起こすリスク因子の報告は多いが、受傷期間に与える影響についての報告は見当たらない。そこで本研究では、脆弱性骨折のうち大腿骨近位端骨折および椎体骨折後1年以内の再骨折と1年以上の再骨折を比較することで受傷期間に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】2017年から2022年までに骨折で入院した患者は809名で、大腿骨近位端骨折、椎体骨折で入院した患者は595名であった。そのうち、大腿骨近位端骨折および椎体骨折後に大腿骨近位端もしくは椎体の二次性骨折を生じた46名を対象とした。調査期間のうち1年以内で二次性骨折を生じた患者21名を短期群（再入院までの期間：132.6±78.9日）、1年以上で二次性骨折を生じた患者25名を長期群（再入院までの期間：768.19±272.9日）とした。調査項目は性別、初回骨折時の年齢、Body Mass Index、Mini Mental State Examination（以下、MMSE）、認知症の有無、アルブミン値、1回目退院時の運動Motor Functional Independence Measure（以下、FIM）、歩行の自立、10m歩行時間、6分間歩行距離、Berg Balance Scaleとした。認知症の有無はMMESで23点以下を認知症あり、歩行の自立はFIMで歩行項目が6以上を自立とした。統計解析はMann-Whitney U test、または分割表の検定を用いた。統計解析はEZR for windows (ver. 1.37) を使用し、有意水準は5%未満とした。なお研究に際し、当院倫理委員会の審査を受けた。

【結果】短期群と長期群を比較して、長期群が歩行の自立が多かった（ $P=0.04$ ）。そのほかの調査項目では有意な差は認められなかった。

【考察】非骨折群と再骨折群を比較した先行研究では、年齢、女性、運動機能や認知機能の低